

AALA ニュース 105号 内容紹介

ウクライナ特集第6弾

編集部

「ブチャの虐殺」以来、すっかり時計の針が逆戻りしたようです。ロシアは自分がしていることが無法だということをすっかり忘れてしまったようです。ロシア軍が発射したすべての砲弾がウクライナの地に落ちていることについて自覚しなければなりません。

ただ一連の経過の中で、それでもやはり「和解以外の道なし」の実感も強まっているように思えます。

「第6弾」はとくに、4月7日に行われた3回目の国連総会の動きに焦点を合わせて紹介しています。

1. シンガポールはウクライナ人権侵害の精査をもとめる

シンガポールはロシアに直接制裁を課している唯一のASEAN加盟国です。バラクリシュナン外相は、ロシアに対して「適切な制裁と制限」を課す計画であると述べました。シンガポールはまた、武器として使用される可能性のある材料に貿易制限を課すことを検討していました。

このことを考えると、今回棄権に回った決断の重みを感じます。

* このほか、ASEANではマレーシア、インドネシア、カンボジアが棄権した。ベトナムは反対票を投じました。

* マレーシアの国連代表団は、投票に棄権した理由について、次のように説明しています。

「人権理事会メンバーの資格停止のような重要な決定は、性急に行われるべきではありません。また、そのようなかたちで、調査の結果に予断を与えるべきではありません。

このような重要な問題は、決議 60/251（人権理事会の設立に関する）の完全な

精神と文言の下で、過去と同様の平等な扱いと正当な手続きを踏んだうえで、決定されなければなりません」

2. 4月7日国連総会でのベネズエラとキューバの発言

ラテンアメリカ研究家の新藤さんの紹介を得て掲載します。

失礼ながら、2国の発言を1本の記事にまとめさせていただきました。キューバの発言の最後で「**あなた方は米国の人権侵害を告発できるだろうか**」という言葉にはグサッと刺さるものを感じます。

3. G20 インドネシアが調停に積極的

今年のG20サミットの開催国インドネシアがウクライナ停戦へと動いていることの論評です。著者はインドネシア政権の裏事情にも通じた人のようです。驚くのは「1988年から1991年にかけて、カンボジアの武力紛争を停止させ、ベトナムのカンボジア占領を終わらせ」という記載、「1993年、インドネシアはイスラム会議機構の議長を務め、西ジャワのチパナス(Cipanas)で第2回非公式な事前協議を開催した。この会談で「了解覚書」が結ばれ、1996年のフィリピン政府とモロ民族解放戦線との和平協定」に結びついたという記載です。ASEAN史に興味ある方に一読をおすすめします。

4. 日経「ロシア追放で亀裂露呈」を読む

4月9日日経三面のトップ記事の紹介です。国連総会の前回決議(3月24日)との対比が図表化されていて、興味深いものとなっています。

5. 南ア 「対話と調停が紛争を終わらせる唯一の道」

前回の国連総会で独自案を提出して話題を呼んだ南アフリカの、今回決議前の発言です。よりいっそう提案の趣旨が鮮明となっています。

文末のコメントでは政府はコテンパンです。今後、和解の兆候が見え始めれば変わっていくのではないかと期待します。

6. スプートニク「公安調査庁がネオナチに謝罪、テロリスト・リストから除外する」

ありがちなニュースと言えればそれまでですが、日本のメディアの遅れを象徴している事件です。

[テレ朝ニュース](#)によると、4月1日、ソ連大使館が「日本の公安調査庁がウクライナの国家組織「アゾフ大隊」をネオナチ組織と認めている」とSNSで発信した。これを受けて公安調査庁は8日、「国際テロリズム要覧 2021」からアゾフ大隊の記載を削除した。

スポーツニク通信の発信は9日、これを報道した[テレ朝ニュース](#)のクレジットは2022/04/13 21:45 ということで、まるまる2週間の遅れ。

7. ブルメンソール「BBCの“マリウポリ劇場の爆撃”報道はでっち上げ？」

1

8. ブルメンソール「BBCの“マリウポリ劇場の爆撃”報道はでっち上げ？」

2

9. ブチャの虐殺は偽旗作戦？

いずれも、ウクライナ側情報への反証として発表されたものです。泥仕合の世界かも知れませんが、シンガポールや南アフリカの躊躇の理由はここら辺にあるのかなと…

9. の文末ジュリアン・レプケのツイッターは、(本当だとしたら)恐ろしい内容を含んでいます。

10. 日経新聞より「食料高騰と新興国・途上国」

お正月の記事ですが、ウクライナのおかげでだいぶ遅れました。

11. 河内研一「世界を知る_T・K生こと池明観氏と AALA」

埼玉 AALA、河内さんの寄稿です。亡くなられた T・K 生こと池明観氏への追悼文です。